城下町

城下の役割

高田の城下町は、地理的・経済的条件などを考え計画的に造られました。
城下町を発展させるために、街道が城下を巡るように整備し、その街道に沿って、交通・運輸にかかわる町や、商業・流通にかかわる町などを配置しました。
さらに、専門的技術を持つ職人たちの町も配置するなどして、各町が城下都市のそれぞれの役割を持てるよう成立させたのです。
その役割を保護・統制したのは大名でした。特定の業種の営業を特定の町にのみ認める特権を与えたのです。例えば小町（こまち）三町（さんちょう）（本町４～６丁目）は塩から雑貨に至るまでさまざまな品物を扱う問屋町とし、問屋を通さないと信州出入荷物が流通できない仕組みになっていました。また、当時の重要な食品である魚類の取り扱いは田端町だけに限られていました。
武家町に隣接する所には、武士の生活に必要な職人が住みました。各個別町には名主がいて、各町の自治にあたりました。

武家町と町人町・寺町

図で見るように、高田城の周りに武家町が造られました。現在使われている東城・西城・南城・北城の町名は城からの方角を示し、大手町や大町の一部とあわせ、武家が住んだ地域でした。
高田藩主は八家が入れ替わり、その家臣の多少により武家町の規模も変わりましたが、町人町の面積よりはるかに広かったことがうかがえます。
一方、町人町は、現在の南本町・本町・北本町・東本町・仲町・大町の各通りに整然と造られました。高田城下町は、およそ40の「個別町」から構成されていました。
武家町と町人町との標高を比べると、全体的に町人町の方が水害を避けやすかったといわれています。
また、西側には寺院を集めて寺町を形成するとともに街道の出入口付近にも寺院を配置しました。